



**Data**

監督: 中野量太  
脚本: 中野量太/菅野友恵  
原案: 浅田政志『浅田家』『アルバムの子カラ』(赤々舎刊)  
出演: 二宮和也/妻夫木聡/黒木華/  
菅田将暉/風吹ジュン/平田満/渡辺真起子/北村有起哉/  
野波麻帆/駿河太郎/池谷のぶえ/松澤匠/篠原ゆき子/後藤由依良

## 👁️👁️ みどころ

所詮ただの家族写真。年賀状にプリントされたさまざまな家族写真を見た時、多くの人がそう思うが、政志は『浅田家!』でプロの写真家に。

そのための家族4人の奮闘ぶりは面白いが、本作の真骨頂は2011年3月11日東日本大震災以降の「写真洗浄」活動と、それをまとめた『アルバムの子カラ』にある。「なんじゃ、この奇妙な家族写真は!!」から始まり、次第に『アルバムの子カラ』に引き込まれ、涙することは必至だ。

本作に見る二宮和也のほんわかした演技力と、『湯を沸かすほどの愛』(16年)に続く中野量太監督の演出力に拍手!



### ■所詮ただの家族写真! されど家族写真…! ■

男はメカが大好きな動物だから、多くの男は写真(カメラ)が大好き。そんな特徴は結婚して子供が生まれると増幅されるようで、毎年の年賀状に子供を含めた家族写真をプリントする父親は多い。もらった方は「ただの家族写真!」と一瞥するだけだが、撮る方は撮影場所、撮影のテーマ、服装の準備等々、毎年大変だ。しかし、当の父親は同時にそれが楽しみだから、嬉々としてやっているケースが多い。本作を観ていると、三重県の津市に住む4人家族、浅田家の家長、浅田章(平田満)がそうらしい。浅田家の家計を支えているのは妻の順子(風吹ジュン)で、章は料理、洗濯、家事一切を切り盛りする“主夫”であることは、ストーリーの展開に連れてすぐにわかってくるが、そのカメラ好きと毎年の年賀状の家族写真へのこだわりは、素人離れ?

そんな父親の影響と、ある時父親から立派なカメラを譲り受けたことがきっかけで、浅田家の次男政志(二宮和也)は、しっかり者の長男幸宏(妻夫木聡)とは正反対の“我が道を行くタイプ”で、21歳にして親元を離れて大阪のカメラ専門学校に進むことに。そ

んな政志が卒業に際して与えられたテーマは、「一生にあと一枚しかシャッターを切れないとしたら…?」というものだった。そこで悩みに悩んだ末、政志がたどり着いたのが“家族写真”だが、さあ、その家族写真とは…?

## ■□■タイトルが家族写真なら、ストーリーも家族写真! ■□■

本作のパンフレットは1100円と高い。また、パンフレットには普通イントロダクションやストーリーが載っているはずだが、アレレ、本作のパンフレットにはそれがない。その代わりに、冒頭から20頁にわたって、「消防士」「極道」「レーサー」「疲れたヒーロー」「選挙」「バンド」「大食い選手権」「日本代表」「医者」「ガソリンスタンド」「泥棒」「海女さん」「ラーメン屋」「酔っぱらい」「帰り道」「授賞式」「ラグビー」「お葬式」「怪我」と題された、「浅田家!」の写真が並べられている。そう、『浅田家!』と題された本作のストーリーは、これらの写真の通り、「消防士」から始まり、「お葬式」で終わるわけだ。この何枚かの写真の中で私が「まとも」と思ったのは、「第34回木村伊兵衛写真賞授賞式」の写真だけ。それ以外は、すべて、「なんじゃ、こりゃ!」と思うものばかりだ。

したがって、政志がはじめて開いた個展にやってきた観客の一人である、赤々舎代表の姫野希美(池谷のぶえ)が、その明けっぴろげな性格と相まって(?),一枚ごとに笑いを隠すことができなかつたことにも頷ける。他の出版社では全然相手にしてもらえなかつた、そんな政志が撮った“家族写真”を写真集として出版することができたのは、そんな偶然の出会いによるものだ。「それにしても、売れないわねえ!」と希美を褒に感心させていた写真集『浅田家!』が、その後、次第に売れ始め、第34回木村伊兵衛写真賞を受賞するに至ったのは一体なぜ?

中野量太監督は、デビュー作の『湯を沸かすほどの熱い愛』(16年)、『シネマ39』28頁)で第40回日本アカデミー賞をはじめ、多くの賞を受賞した1973年生まれ若手監督だが、「なんだ、この奇妙な家族は!」と思った政志の写真集を元にこれだけの脚本を書き、これだけの感動作を演出したのだから、たいしたものだ。

## ■□■“家族写真”のニーズは?戦場カメラマンに比べると? ■□■

写真館をテーマにした名作は、たくさんある。しかし、デジカメが普及し、スマホのカメラとしての撮影能力が上がってくると、家族の記念日を写真館で写真撮影、という習慣も薄れてきた。私はそう思っていたが、政志の初めての写真集『浅田家!』を見て、政志のもとに「私の家族写真を撮って欲しい。」という注文が入ってきたからすごい。兄と違って何かとだらしない(?)政志が、東京に出て暮らしているのは、ひと足先に東京でアパレル関係の仕事に就き、立派に独り暮らしをしている川上若奈(黒木華)がいたため。つまり、政志は、そんな幼馴染で、子供時代に政志が撮る写真のモデルになっていた若奈の部屋に転がり込み、居候を決め込んでいたわけだ。ところが、そんな政志も、写真集『浅田家!』の出版と、第34回木村伊兵衛写真賞の受賞をきっかけに、「家族写真を撮ってくれ。」との注文が舞い込んできたから、これにて政志も立派なプロの写真家に。

ジュリエット・ビノシュが主演した『おやすみなさいを言いたくて』（13年）（『シネマ35』220頁）は、報道写真家（戦争写真家）＝いわゆる“戦場カメラマン”を主人公にした素晴らしい映画だったが、そんな戦場カメラマンと比べると、家族写真を撮るだけの写真家なら簡単。2012年に亡くなった戦場カメラマン山本美香のような命の危険も全くないものだ。

本作で政志に家族写真の撮影を依頼してくるのは、高原家、佐伯家などだが、その撮影の過程は素人の私も「なるほど」と納得できるものばかり。こんなスタイルで家族写真の注文が次々とやってくれば、政志も気楽にアイデアを考えながら、それなりに稼いで、いい生活ができるかも…。

## ■□■後半からは一転、「写真洗浄」の物語へ■□■

2011年3月11日、東日本大震災が発生。あの日、私は大阪市内のフィットネスクラブで運動をしていたが、テレビに釘付けになった私の目には、津波に流されていく家々が映っていた。その日を境として、多くのボランティアが被災各地に入り、様々な専門家は「自分に何ができるのか」と自問自答することに。ちなみに、映画界では撮影準備期間中に東日本大震災が発生したため、急遽脚本を書き替え、舞台を震災後の日本に変更した園子温監督の『ヒミズ』は、東日本大震災後の素晴らしい作品となっている。（『シネマ28』210頁）。しかして、その時点では曲がりなりにもプロの写真家になっていた政志は、専門家の端くれとしていかなる行動を・・・？

政志の行動は、『男はつらいよ』の「フーテンの寅さん」と同じように自由だから、リュック一つを背中に背負えば、すぐどこへでも向かうことができる。政志が岩手県内（プロダクションノート）の被災地へ向かったとあえざる目的は、娘の小学校入学記念の家族写真を撮った高原家の安否の確認だったが、ごった返すような被災地の一角で、津波のために泥だらけになった写真を洗浄し、持ち主に返す「写真洗浄」のボランティアをしている小野陽介（菅田将暉）に出会うと・・・？

私は一瞬この小野を演じている俳優が誰かわからなかったが、これが『アルキメデスの大戦』（19年）（『シネマ45』78頁）や『キネマの神様』の菅田将暉だと知ってビックリ。『ああ、荒野 前篇・後篇』（17年）（『シネマ41』50頁）で見たボクサー役とは正反対の、こんな内気で気の弱そうな今時の若者像をこれだけしっかり演技できる菅田の演技力に感服。それはともかく、小野はなぜこのような「写真洗浄」のボランティアを思いつき、一人でもくもくとその作業に従事しているの？はじめて会った日に、彼のボランティア活動に協力した政志は、当然のように翌日から一緒にこのボランティアに従事するようになったが、それは一体なぜ？

さらに、世の中にはいろいろな人がいるもので、小野の活動に共感した被災地の女性・外川美智子（渡辺真起子）も毎日一緒に活動するようになったが、小野と違って何かと外向きで積極的な性格の美智子の協力は力強いものになった。そのため、毎日3人が屋外で

行っていた写真洗浄活動はどんどん広がり、ある日からは学校の教室を使用できることになったから、更に充実。そこには4万枚の写真が集まったそうだからすごい。もっとも、この写真洗浄の物語はそれだけで完結せず、そこに震災で行方不明になった父親の写真を探している内海家の長女・内海莉子（後藤由依良）を登場させることによって、映画全体を素晴らしいクライマックスに導いていくことに・・・。

## ■□■女はプロポーズを待つだけの動物？いや本作を観れば？■□■

女優竹内結子が40歳の若さで亡くなった今、30歳の女優黒木華はその後を継ぎ、日本映画界を背負っていくべき女優だ。『日は好日』（18年）（『シネマ43』270頁）、『ピブリア古書堂の事件手帖』（18年）（『シネマ43』265頁）、『来る』（18年）（『シネマ43』未掲載）等でもその演技力は光っていたが、本作でも、それは健在。いや、中野量太監督の演出によってますます磨きがかかっている。

何となく頼りない今ドキの若者・政志を長年にわたって支え続けたうえ、うまく男からプロポーズさせる戦略家（策路家？）としての“女のずるさ（？）”を見事に表現している。それに注目。日本では長い間「女はプロポーズを待つだけの動物」だったが、「ジェンダーフリー」の時代の今、それはない。もっとも、そうは言ってもやはり、女の方から直截的に「私と結婚してください」とプロポーズするケースは、まずない。団塊世代の男としての私に言わせれば、若い男女が1つの部屋で同棲生活をしていれば、自然にセックスに励むことになり、その結果、往々にして女は妊娠してしまうもの。そう思うし、現にそういうカップルを私は学生時代にたくさん見てきたが、今ドキの草食系男子たちと、その面倒をみる女たちの間ではそうでもないらしい。そうかといって、政志と若奈の間にセックスが全くなかったかということ、絶対それはあり得ないから、これも若奈がうまくコントロール・・・？

それはともかく2011年3月11日の東日本大震災の時の政志が32歳なら、若奈も同じ。2019年に父親の誕生日に帰省した時の政志が40歳なら、若奈も同じ。一体いつまでこんな“つかず離れず”の関係を続けるの？なぜ、政志は「結婚しよう」と言ってくれないの？そんな若奈の女ゴコロを理解してくれているのは、政志の母親・順子だけだが、こればかりはいくら母親でも政志に強制することはできない。しかして、ある日若菜が立てた“ある戦略”とは？今時の若い男女は、この手の「つかず離れず」の関係が多いかもしれないので、そんな「待つ身」の女たちは本作に見る若奈の戦略・策路をしっかりと胸に刻み付けてもらいたい。

## ■□■『アルバムのチカラ』とは？その物語と結末に涙また涙■□■

政志の写真集は『浅田家！』だけでなく、『アルバムのチカラ』等々もあるらしい。この『アルバムのチカラ』は政志が陽介とともに2年間にわたって行った写真洗浄活動の姿を撮影したものらしい。

政志が陽介の活動に賛同し、そのボランティア活動に参加した時、政志は自分がプロの

写真家であることを知らせなかったが、ある日偶然『浅田家!』を見て、政志が有名なプロの写真家だと知った莉子はビックリ! そんな政志の専門(?)が家族写真を撮ることだと知った莉子が、政志に「震災で行方不明になった父親の写真捜しに協力してもらうだけでなく、「私の家族の家族写真を撮って欲しい」とお願いしたのは当然だ。しかし、莉子の家族は今、津波被害から生き延びた母親と妹だけで、父親は行方不明のままだから、いくら頼まれても政志には内海家の家族写真は撮れっこない。そのため、莉子の頼みを断らざるを得なかったが、それは辛いものだった。

本作で政志役を演じた二宮和也は、中野監督が唯一無二の存在として選んだそうだが、たしかに本作の政志役は二宮が演じるにピッタリ。前半の「フーテンの寅さん」とはまた違う、自由気ままでチャランポランな男がピッタリなら、後半の、身の丈の中で悩みながら自分の道を見出し、周りの人すべてに幸せ感を与えていく不思議な魅力の政志役もピッタリだ。父親のお葬式に参加するため故郷の津市に戻った政志が、兄の浅田幸宏と共に父親の思い出を辿る中、あるアイデアを思いつくところが、本作のクライマックスに向けての伏線になる。父親のお葬式を終えて再び被災地に戻ってきた政志は、吹っ切れた顔で、自信をもって莉子に対して「内海家の写真を撮ろう」と宣言したが、父親がいないのに、どうやって家族写真を撮るの?

本作のパンフレットには、『アルバムのチカラ』に掲載されているはずのたくさんの家族写真は掲載されていないから、それはあなた自身の目でスクリーン上でしっかり確認してもらいたい。なるほど、これが『アルバムのチカラ』なのか! 本作後半からクライマックスにかけては、そんな物語と『アルバムのチカラ』の物語のクライマックスに向けて涙、涙また涙・・・。

2020 (令和2) 年10月12日記